

〔松浦屏風と桃山・江戸の美術展によせて〕

尾形光琳筆

「樹下人物図」(扇面貼交手筈)について

「扇面貼交手筈」は、八枚の扇面画と四枚の団扇画を、木製の箱とそこに収めた中籠に貼り、余白に金箔を敷き詰めた作品です(図1)。扇面画や団扇画には、折り畳み、骨を挿した跡が残り、当初は、それぞれ別に制作されたことがわかります。江戸時代では、扇や団扇は芸能や社交に欠かせない実用品でした。需要も多く、その時々流行や個人の嗜好に応じて新調されました。使用しなくなった扇面や団扇は屏風に貼られ、新たに調度として使用されることがあります。このような屏風を、扇面画では、「扇面貼交」「扇面散」、「扇面流」と呼びます。屏風に貼ると、画題の取り合わせや、「貼交」、「散」、「流」など、構成の面白さが加わり、集合画面の絵画作品として鑑賞されるようになります。末広りの扇面画の意匠には吉祥的な意味合いがあり、染織や漆工、陶磁などの工芸作品にも好まれました。手箱の蒔絵作品では、2点の「扇面散蒔絵手箱」が大倉集古館と東京国立博物館に所蔵され、ともに重要文化財に指定されています。

この「扇面貼交手筈」は、八枚の扇面画と四枚の団扇画を貼るために、大きさを定め、中籠を設け、角を丸く撫めたとされます。金地に扇面画と団扇画を貼り交ぜた屏風を、手筈の形を借りて、立体的に仕立てた

作品と言えます。手筈は何かを入れる調度ですが、実用性よりも鑑賞性を重視し、飾るために制作されたのでしょう。この作品を収める箱の蓋表と側面には、「光琳好 地紙張文庫」と墨書され、「光琳好」、すなわち、尾形光琳の趣向と伝えられてきたことがわかります。

光琳は絵画だけではなく、漆工品の意匠を考案し、優れた作品を残しています。光琳作と伝えられる蒔絵作品では、「業平蒔絵硯箱」(根津美術館蔵)に扇面画の意匠が用いられています。「扇面貼交手筈」では、三枚の扇面画にしか、光琳の落款と印章がありませんが、光琳自身の趣向と認めるならば、この他の扇面画や団扇画も光琳作品と考えるのが自然です。まず、扇面画や団扇画として制作され、手筈に仕立てる際に、もう一度、光琳の美意識が加えられたこととなります。

「扇面貼交手筈」の四つの側面には、十本骨の扇面画を一枚ずつ貼っています。扇面画の寸法は縦が約18cm、上弦が約50cmです。この大きさは一つの側面に収まらず、扇面画は隣り合う左右の側面に及びます。その重なり具合から、最初に「樹下人物図」(図2)を貼り、時計回りに側面をめくって扇面画を貼っていったことがわかります。最初に貼った「樹下人物図」が「扇面貼交



図3

手筈」の正面と思われるが、この作品には、落款と印章がなく、光琳作品と認めるには検討を要します。

「樹下人物図」は六人の公家が青々と葉を茂らせた木の下陰に集う光景を描いています。この作品は右下がりに15度ほど傾き、この傾きによって、扇を手にした狩衣姿の公家が側面に正対しています。この人物は身体を開いて、扇で左の方向を指し示しており、物語の始まりを告げるようです。この公家を含む四人の姿は「西行物語絵」から学ばれています(山根有三「光琳筆扇面貼交手筈」・『大和文華』33号)。三の丸尚蔵館には、光琳が模写した四巻の「西行物語絵」が所蔵されています。俵屋宗達が禁裏の「西行物語絵」を模写した作品で、さらに光琳が模写した作品です。扇を持つ人物は、この第一巻の第二段に描かれています(図3)。ただし、「樹下人物図」では、顔を大きく、縦の寸法を短くしており、表情はより豊かに、量感により充実して感じられます。また、このように描くことで、体の中心から鳥帽子、扇、沓の先端までがほぼ同じ長さになり、一つの弧線で繋がれているように見えます。このような明晰な表現を好む造形感覚は、画面構成にも認められます。「樹下人物図」の傾きを元にもどすと、画面構成の特色が明らかになります(図4)。「樹下人物図」では、木が重要な役割を果たしています。近景に大きく描かれた木は奥行き指標となっており、その向うに広がる空間を安定させ、画面をほぼ3対2に分割することで、左右の空間の対比によるリズムをもたらしています。木は露根によってしっかりと支えられ、露根



図4

の伸びる方向が地平の広がりを暗示します。扇を持つ人物は左の空間のほぼ中央、露根を逆に伸ばした延長線上に描かれています。この扇を持つ人物は一塊になった他の五人との均衡を保ち、扇の示す力強い方向性が画面の均衡を引き締めています。しかも五人の人物は、円形に収まるような扇を持つ人物とは対照的に、鋭角状にまとめています。○形と△形のように、対照的な造形を組み合わせる画面構成は、「竹梅図屏風」(東京国立博物館蔵)の若竹と梅のように、多くの光琳作品に認められます(図5)。

「樹下人物図」の画面構成には湾曲する扇面の特徴が強く意識されています。「扇面貼交手筈」の正面に貼られることで、さらに、その外側に長方形の画面ができます。扇を持つ人物も、扇面形の画面から開放され、「扇面貼交手筈」の案内人として、次々に展開する画面へ鑑賞者を導く新たな役割を担っているように思われます。(中部義隆)

図3は「三の丸尚蔵館年報・紀要」第7号(宮内庁 平成14年発行)、図5は「原色日本の美術14 宗達と光琳」(小学館 昭和44年発行)より複写させていただきました。

図1

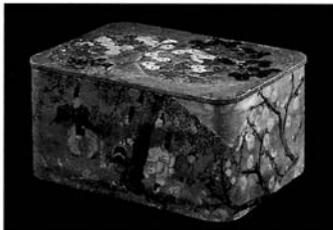


図2



図5

